

令和6年度 きゅうり技術情報 No.2

大船渡農業改良普及センター
 電話：0192-27-9918
 FAX：0192-27-9936



- ① (ハウス) 収穫開始以降は、かん水量を増やしましょう。
 ② (露地) 高さ 30 cm までの雌花と側枝は摘除し、草勢を確保しましょう。
 ③ (病害虫) 病気は、黒星病、斑点細菌病、べと病、害虫は、アブラムシ類、ハダニ類に注意しましょう。

1 気象経過と予報

(1) これまでの気象経過と生育状況

気温は、平年より高く推移しました。降水量や日照時間は、平年並でした。
 ハウスの生育は、概ね順調です。アブラムシ類やアザミウマ類の発生が見られますので、注意が必要です。

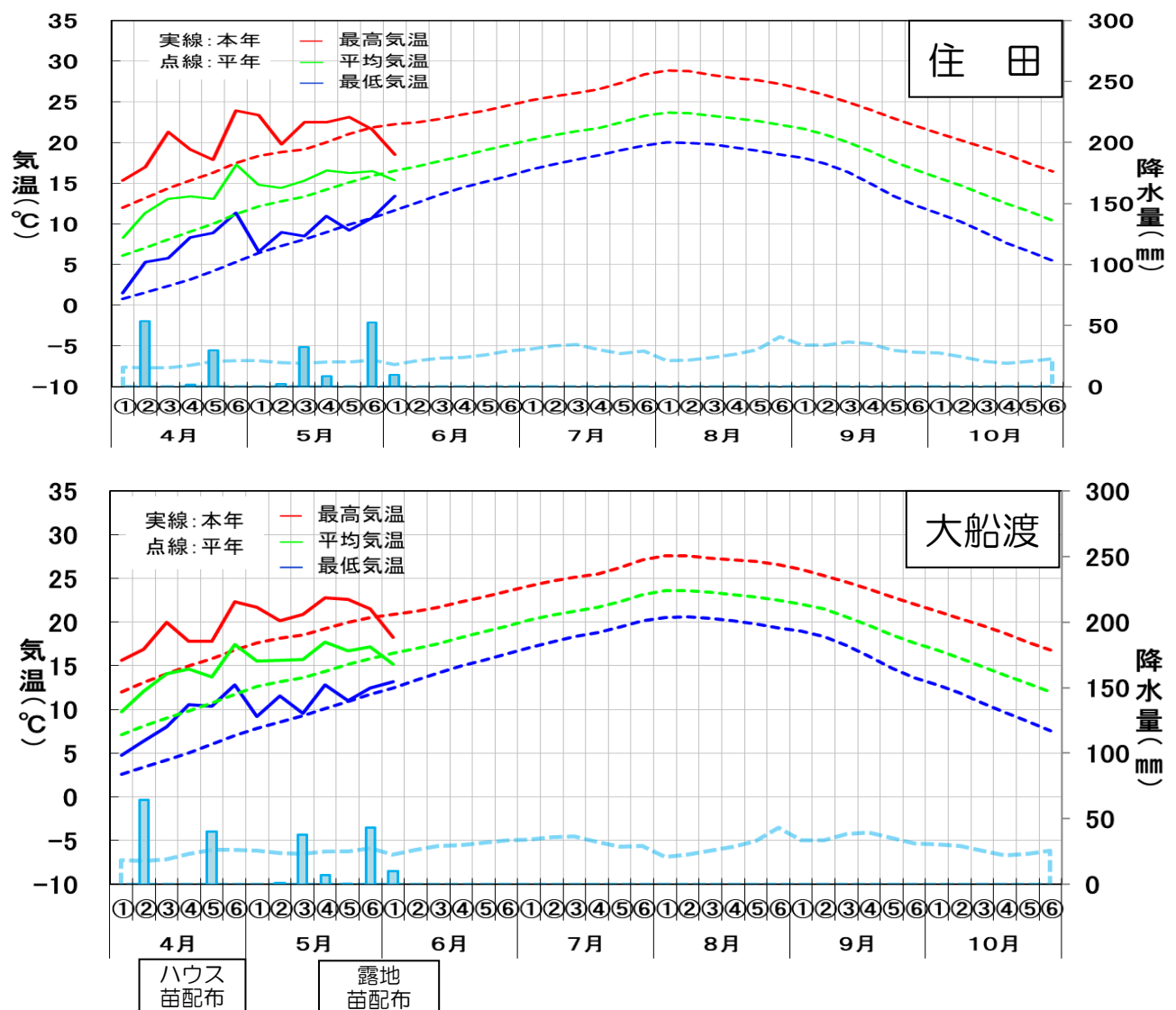


図1 これまでの気象経過 (アメダス)

(2) 今後の予報

仙台区気象台の発表（5月21日）では、向こう3か月の気温は、6月と8月は平年より高い見込みです。降水量は、ほぼ平年並の見込みです。

また、梅雨入りは、去年は6月9日ごろ、平年だと6月15日ごろです。梅雨入り後は、降雨が続き病気が発生しやすくなるため、予防散布を行いましょう。

2 ハウスきゅうり

(1) かん水、追肥

1日のかん水量の目安は、**収穫開始以降は 2.0L/株**です。特に、収穫開始以降は、きゅうりの必要水分量が大きくなります。曲がり果や空洞果が発生するなど果形がよくない場合は、かん水量を増やしましょう。

また、晴天時、**乾燥する場合は、積極的に通路散水し、ハウス内の湿度を維持**しましょう。

追肥は、果実収穫開始ごろから積極的に行いましょう。追肥量の目安は、**収穫量 800 kg（160 ケース）/10a ごとに窒素成分で 2.5～3.0 kg**です。

(2) 温度管理

日中の最高気温が 30℃を超えないように、側窓や入口を開けて換気を行いましょう。

(3) 整枝管理・摘葉

充実した側枝の発生を促すためには、側枝に光を当てることが重要です。主枝摘心期以降は、**下～中段の葉が特に混みあってきます**。曇雨天を避け、収穫作業と合わせて**随時摘葉**しましょう。

3 露地きゅうり

(1) 定植後1か月の初期管理

生育初期に十分に根を発達させることは、長期に安定生産するためには重要なポイントです。これは、ホモプシス根腐病対策としても非常に重要です。

定植後、本葉 10 枚ころまでに、**高さ 30 cm (5～6 節目) までの雌花と側枝は早めに摘除**し、主枝の草勢を確保します。**主枝の着果位置は、高さ 50～60 cm (8～10 節目)**とし、それ以下には着果させないようにします。

(2) かん水

定植後 1 週間程度は、活着促進のために株元を乾かさないうにかん水をしましょう。活着の目安は、葉の枚数が定植時の倍の枚数になり、巻きひげが太く張ってきたころです。活着が確認されたら、かん水を控え、根を深く張らせましょう。

(3) 摘葉

本葉が 15～16 枚になったら、主枝の下段 2～3 枚程度摘葉します。草勢維持のため、株当たり一度に 2～3 枚以内を原則とし、過度な摘葉とならないように注意しましょう。

4 ほ場の排水対策

例年、ハウス、露地ともに排水不良が原因と思われる生育不良が見受けられます。**排水をよくすることで、根が発達し、長期安定生産につながります**。また、十分に根を発達させることは、ホモプシス根腐病対策としても非常に重要です。

水田転作の場合は、水路等の点検整備を行い、ほ場外からの水の侵入を防ぐとともに、降雨後の排水を促すための**明きょ・排水溝の設置や高うね栽培**を行いましょう。

5 薬剤散布のポイント

- (1) 6月は**アブラムシ類、黒星病、斑点細菌病**、7月は**アブラムシ類、ハダニ類、べと病**に注意しましょう。
- (2) **防除暦を参考に、定期的に薬剤散布を実施しましょう。**農薬を使用する際は必ず農薬ラベルを確認し、使用基準を遵守してください。
- (3) 薬剤散布では、**アーチの内側と外側の両側から葉の表裏、下位葉まで十分な量の薬液がかかるように散布しましょう。**特にアーチ上部は、薬剤が付着しにくいため注意が必要です。
- (4) 病気が蔓延した後では薬剤の効果が低くなります。**病気が疑われる葉は見つけ次第、摘葉し、発生が少ないうちに特別散布を実施しましょう。**

病害虫名	6			7			8		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下
アザミウマ類（ハウス）									
ハダニ類									
アブラムシ類									
べと病									
うどんこ病									
黒星病・斑点細菌病									
炭疽病・褐斑病									

：発生時期
 ：重点防除時期

図2 病害虫の発生時期の目安(アザミウマ類以外は露地での発生時期)

6 主な病害虫の特徴

(1) 黒星病

発病適温は17～20℃前後と低温性の病気です。定植時や収穫期の後半に降雨が続くと多発します。特に生育初期に多発すると、被害が大きだけでなく、後半まで防除が必要となるので、予防散布に努めてください。



図3 黒星病の葉

(2) 斑点細菌病

発病適温は 20～25℃、多湿条件下で発生しやすい病気です。露地栽培では、6月、9月ごろに発生が多く、降雨が続くと発生が助長されます。



拡大した病斑

図4 斑点細菌病の葉

(3) ベと病

20～25℃の多湿条件下で発生しやすく、降雨が続く梅雨期が重点防除時期になります。肥切れや成り疲れなど、草勢が衰えると発生が増えるため、肥培管理に注意してください。

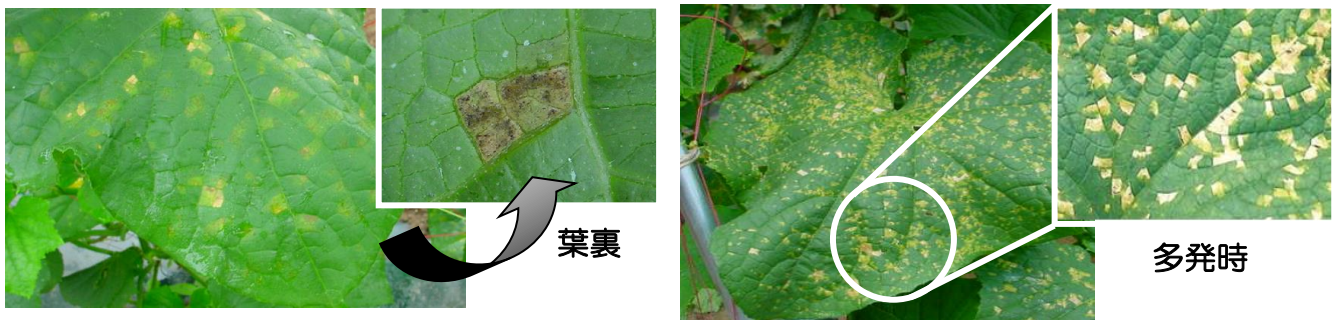


図5 ベと病の被害葉

(5) ハダニ類

ハダニ類は多発させると防除が困難になり、著しく草勢が低下します。圃場周辺の雑草等から侵入してくるので、初期の寄生部位である下葉を定期的に観察し、発生があれば速やかに防除してください。



図6 ハダニ類



図7 ハダニ類の被害 (左：葉、右：果実)

(6) アブラムシ類

5月から9月まで発生があり、夏期に発生が増加します。生育前期は生長部の若い葉やつる、生育後期は展開葉や花に寄生し、吸汁加害します。被害が増加すると生育が妨げられるため、発生があれば速やかに防除してください。



図8 葉裏に寄生したアブラムシ

7 ホモブシス根腐病対策 **管内で発生が確認されています！**

- (1) 収穫開始から8月にかけて発生が多くなります。収穫初期では、日中に葉が萎れ、夕方に回復します。萎れと回復を繰り返すうちに、徐々に下葉から枯れ上がります。
- (2) **土壌伝染性で空気伝染はしません。汚染圃場の土が人や機械を介して移動し伝染します。**
- (3) 対策は、**土壌消毒、土壌 pH の改良(目標 pH 7.5)**です。
- (4) 他の生産者の圃場を訪問する際は、**靴カバーの使用**や**ビニール袋で靴を覆う**等、病原菌の拡大防止に努めましょう。



日中は葉が萎れる



病気が進行し、枯れた株

図9 ホモブシス根腐病が発生したほ場



感染初期（細根脱落部が褐変）



感染末期（黒色の偽子座が形成）

図10 ホモブシス根腐病の根の病徴

写真のような症状が見られた方は農協または普及センターまでご相談ください。

★**いわてアグリベンチャーネット** URL: <https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>
岩手県からのお知らせに加えて、農業技術情報や病害虫に関する情報、各地域の情報など盛りだくさんです。ぜひご覧ください！！

★**6月1日～8月31日は農薬危害防止運動**

農薬を安全かつ適切に使用するために、農薬ラベルでの使用基準の確認、使用履歴の記帳を徹底しましょう。

★**クマにご注意ください！**

各地でクマによる人身被害が多発しています。農作業に当たっては、クマとの不意の遭遇に十分注意してください。